

「ヤン」と「マンシャン」

—中国から見る日本の戦争児童文学

成實 朋子

1 はじめに

毎年十二月十三日午前十時、南京の街にサイレンが半時ほど鳴り響く。長江を航行する船舶や、南京駅を通過する列車もこれに合わせて汽笛を鳴らし、南京大虐殺で犠牲となった人々を悼むのである。

もっとも私は実際にこのサイレンを耳にしたことは無い。南京に留学していた一九九三年当時、この行事はまだ行われていなかったからだ。伝え聞くとところによると、これは一九九四年頃より始まり、次第にその規模を拡大化したのだという。昨年には中国の国会にあたる全人代で、正式に国家の追悼日とすることが定められた。

「南京のサイレン」をここで引き合いに出すのは、何も犠牲者を悼む行為を否定するためではない。ただ私はこの行事が拡大化していく過程の中に、南京大虐殺が中国において「国民の物語」として定着化する様を見るのである。

「南京のサイレン」はほんの一例にすぎない。戦後七十年

がたち、戦争経験者が少なくなっていく中で、戦争にまつわる個々の記憶は、日本でも中国でも、国民を形成する一つの大きな「物語」として纏められようとしている。このような中であって、日本と中国の児童文学は、今後「あの戦争」をどのように描き、記憶の継承を図るのか。

このことを探るきっかけとして、ここでは、日中両国の「戦争児童文学」の中から、前川康男の『ヤン』（実業之日本社 一九六七年）と薛濤（シュエ・タオ）の『満山打鬼子（マンシャン鬼を打つ）』（春風文芸出版社 二〇〇九年）を取り上げ、改めて「戦争児童文学」について考えていく。

2 日本と中国の「戦争児童文学」

反戦・平和をテーマとする「戦争児童文学」は、言うまでもなく第二次世界大戦後の日本の児童文学の中心となってきた領域の一つであり、一九六〇年頃より実に多くの作品が書かれてきた。